

心の鍵

島根大学教育学部附属義務教育学校後期課程 九年 都田紗南

偏見や差別からうまれる「言葉の壁」をなくすため、私は「心の鍵」を持ち続けることの大切さを皆さんに伝えたい。

二月の休日、私は初めて異文化交流活動に参加した。活動内容は、外国人の先生とドイツの伝統料理を作るというものだった。何をするのかわからず、その場に立ち止まっていると、突然横から声をかけられた。でも私は返事ができなかった。英語で話しかけられ、理解ができなかったからだ。日本人講師の方に「彼女は、私と一緒にスープを作る手伝いをしようと言っておられたのですよ。」と教えてもらい、やっとの思いで「オーケー。」と返した。外国人の先生はドイツ出身の女性だった。料理をしながら彼女はドイツのことや彼女が経営するレストランのことを話してくれた。私は慣れない英語での話を聞き流していた。きっと「どうせ理解できないし」という考えが私の頭の中に存在していたのだと思う。すると、参加者の一人が彼女へ「日本に来て辛かったことはあるか。」と質問を投げかけた。彼女はこう答えた。「言葉の壁をはっきりと感じたときです。」と。

「ホロコースト」という言葉を知っているだろうか。ホロコーストとは、第二次世界大戦中にナチスドイツがドイツ国内や占領地でユダヤ人に対して行った大量虐殺のことを指す。罪のない人々に対する差別と迫害が当時六百万人もの人々の心へと牙を剥いた。この出来事はアンネの日記などを通し、全世界へと広まっている。彼女は日本へ来たばかりの頃、ドイツ人だと口にするとうこう言われたそうだ。「え、ドイツって過去に大量虐殺とかしてた国の人だよ。可哀想なことをする人達。信じられない。」啞然とした。こんなにも軽々しく差別と偏見の言葉が直接届けられているという現実。しかもよくよく話を聞いてみると、その言葉は日本語で放たれていたのだ。当時彼女は日本語について勉強途中であり、言われた内容が理解できなかった。それを知った上でその人は差別の言葉を日本語で口にしたのだ。彼女は後々聞いた言葉の内容に大きなショックを受けたという。「ドイツ人であるというだけで差別の目を向けられた。確かにそれは悲しいことだった。でも言葉の壁をはっきりと感じたことが何より悲しかった。」と。その言葉を放った人の心に「伝わらないし」という思いがうまれたその瞬間、差別や偏見をうみ出すアクセルが踏まれてしまったのだ。

「言葉の壁」とは何か。この話から考えてみると、私はアクセルでありブレーキでもあるものだと思う。伝わらないことを盾にして差別や偏見の言葉を届けてしまうアクセル、そして伝わらないことを言い訳につながりを断ってしまうブレーキ。私はつい数分前の自分のことを思い出した。「どうせ理解できないし。」そう思い、話を受け流した私。その行為は彼女に対する差別につながるのではないか。途端に理解ができないから聞かなくてもいいなんて考えをしていた自分が猛烈に恥ずかしくなった。私の心は、無意識に「言葉の壁」を作り、ブレーキをかけていたのだ。

では、「言葉の壁」を作らないために私達は何ができるだろう。私はある言葉を思い出していた。料理が終わると参加者全員に彼女はこう言った。「言語も言葉も人々の心をつなぐ確かな方法だよね。でも絶対それだけではないの。例えばこんな風に。」そう言うと、完成した具材をトルティーヤの上へのせ、私達の方へ振り向いた彼女は今までで一番の笑顔でそれを食べてみせた。「みんなもさあ食べて。」という言葉通り私もトルティーヤを手に取り、ソーセージをのせ炊きあがったお米をのせ、ヨーグルトを使った彼女お手製だというデザートものせ、包んで頬張る。この時味わった、言葉とはまた違っていて、でも確かに私達をつないでくれたあの味を私はこの先ずっと大切にしていきたいと思う。

たった三時間の交流を通して私の心は確かに動き、つながった。言葉が伝わらないから、扱う言語が違うから。それらを盾にし、誰かを傷つける権利なんて誰一人として持っていない。大切なのは私達一人一人の心だ。使い方一つで強靱なナイフにもあたたかな味を届けるスプーンにもなれる言葉たちを優しい心で使い続けること。そして何より、「言葉の壁」を作り、相手や自分を閉じこめるのではなく、違いを認めて受け入れ、その上で何かを通して相手とつながろうとする心をもつこと。そうして壁をも壊す心からうまれた優しい何かを私はまとめて「心の鍵」と名付けた。あの日理解ができず話に向きあう姿勢を見せなかった少し前の私に彼女が与えた「味」は間違いなく「心の鍵」だった。「言葉の壁」を打破できるのは皆が持ち、感じるあたたかな何かであり、「心の鍵」だ。そうしてうまれたつながりを誰もが共有し、届け、愛せる世界になることを私は今心から願っている。